

當流茶之湯流傳集卷之三目錄

婦ひ花の写

客花之写

花心のありひ

舟の花入のありひ

鯉花入の写

早下花生 朧本花生 中口花生

細口花生 飯銅 置籠 垂舟

十七花之圖 大舩 丸舟 小舟 竹百笈切舟花入

一重切之舟 二重切之舟 中口花入

大籠鯉花入 たるひ鯉花入 棚花生

五等印勺之花正卷之習

花心之奇并心得凡九ヶ条之習

炭之出生

才七ヶ条炭子付習并奇

才色炭此墨散く高

炭の寸法并凡炉炭之習

炉灰五法之習

凡炉之徳伏候曰土悉あ之寸法

炭之場之習

あり一炭下らる之習

甚子炭之習

斤口之習

當流茶之湯流傳集卷之三

唐茶并花

嬌之花之習

一茶之花

萩

茨

牡丹花

けいらん花

いさる百合花類

ほろひ花

女郎花

りる格校

かろや

花のぎき

ニまじり花

まき

一茶之花ハ唐の唐茶吾の角柱ハ

一茶之花ハ唐の唐茶吾の角柱ハ

一茶の花ハ唐の唐茶吾の角柱ハ

くあはは花と正花は用べり又茶花

一花はけ花  
 止花よりすへ  
 一花二葉に花口葉六花葉とするを短し  
 花葉産葉あり花とするを又短し也  
 是の時節一の花より長く二倍のりす  
 一花葉長サを尺八寸幅を尺下がよくと上  
 よよと付く口とするをうりしめをす  
 花と入く扱方口へ入物ハ水次よりりりり  
 花切ハ以一文子中して扱ハ名切との付也  
 南堂をさし何と入道具也外布を以ち切  
 く子巾ひ又ハ花板の上二巾あり也

一角花板方板ハおろりハ一メニ至小板半分  
 一丸花板方板ハ十八メ小板ハ十二メニ至  
 老花之智  
 一客よ花ありとするよハ花生とす板よ至花の籠  
 一ハ八寸よ花入扱ありとするよハ老花とす  
 一ハ二番花よりするよハ老花とす  
 二番花よりするよハ老花とす  
 一客よ花ありとするよハ老花とす  
 一客よ花ありとするよハ老花とす  
 一客よ花ありとするよハ老花とす







朧赤此苑生杜若此一色矣道此物也



中大興

客子

か

舟一ノ

中口花生



客子

黒入り唐板



飯銅

蓮花一色



細口花生

実名

か

丸筒板





置  
舩

寛  
口  
方

か  
し  
枝

梅  
草

花  
草

置  
台  
龍

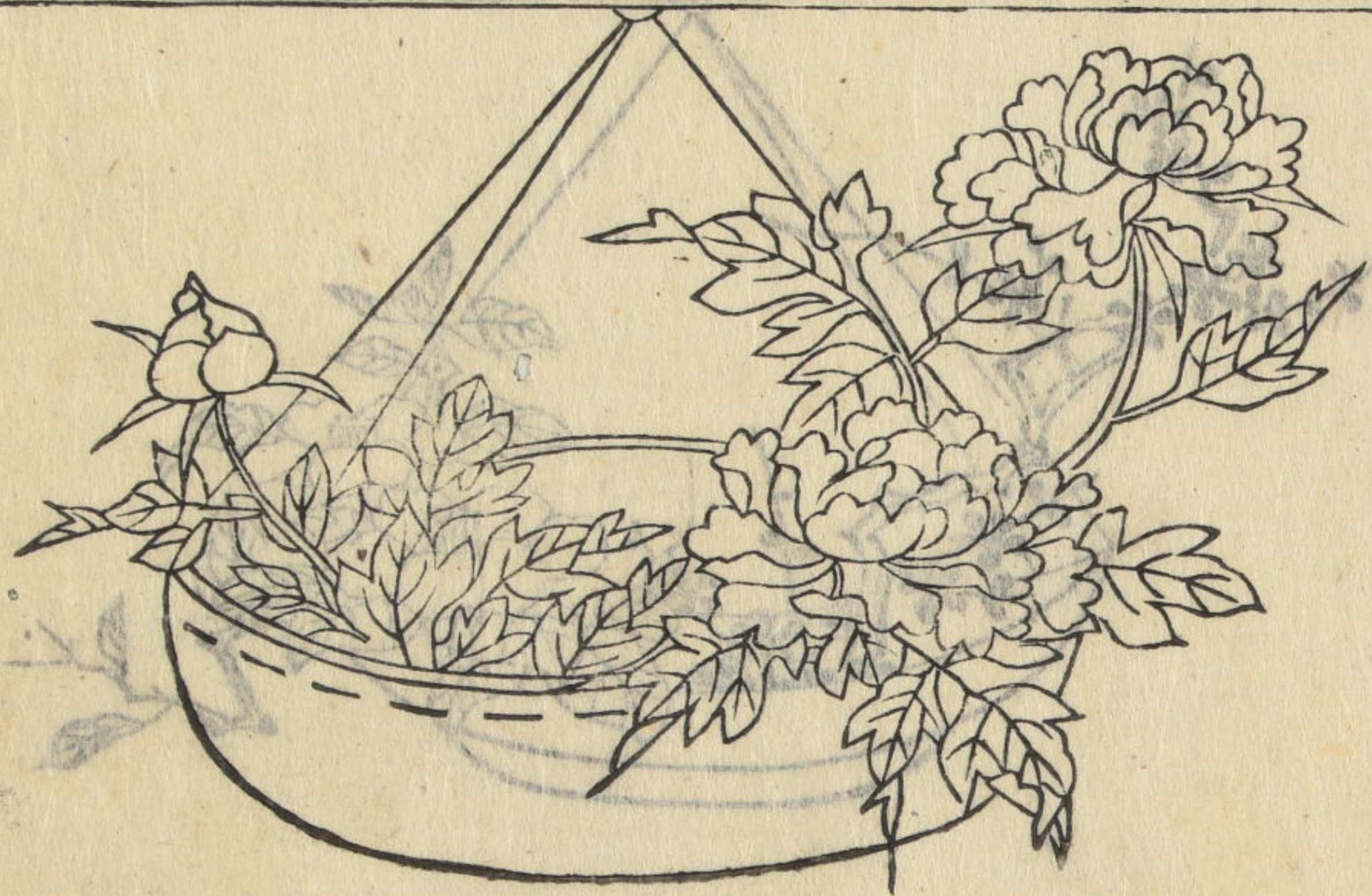
ツ  
キ  
カ  
ホ



花  
草

花  
草

花  
草



客方

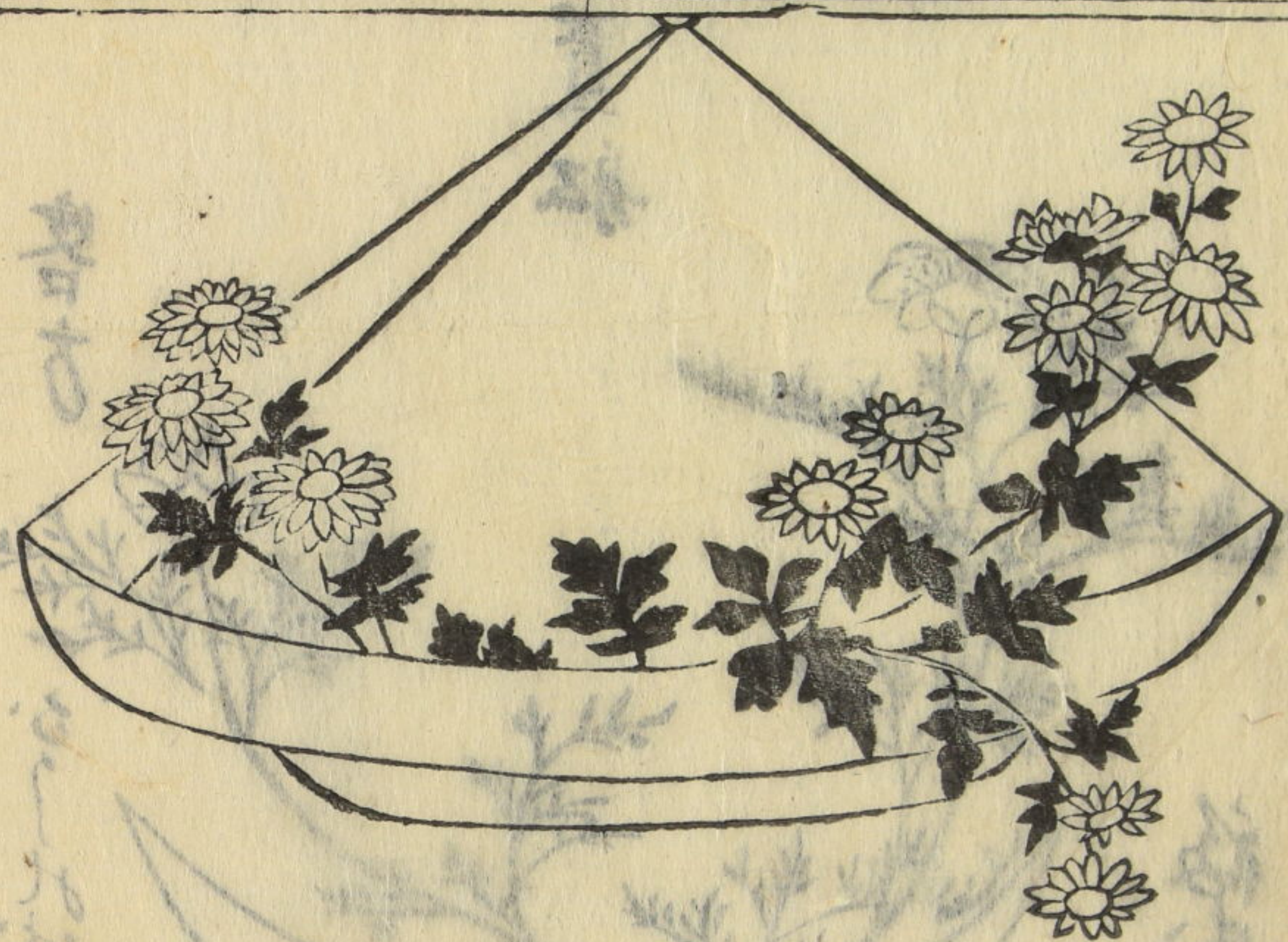
花出舟

九船

花入舟

花名

流花三



客方

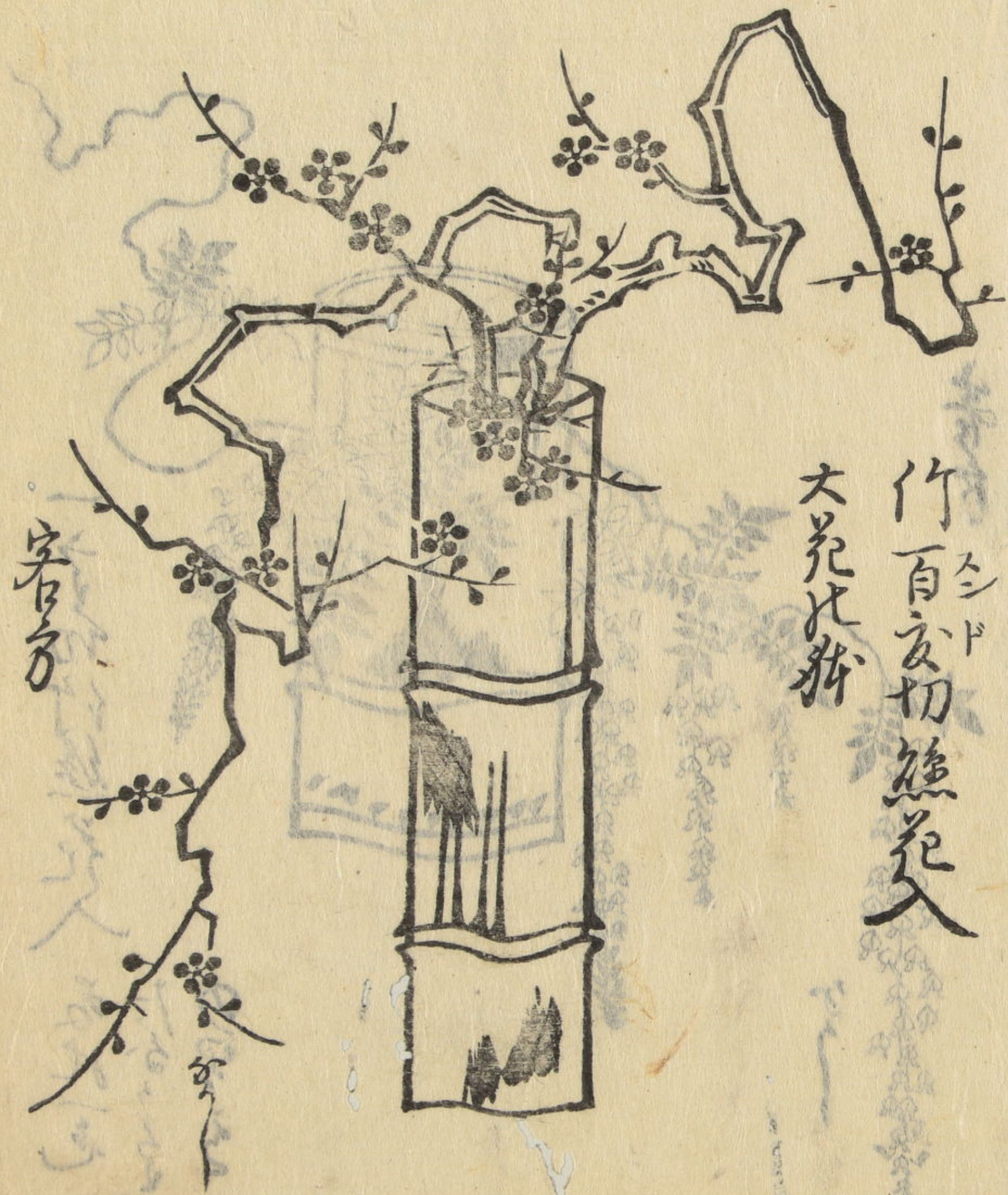
花出舟

大船

花入舟

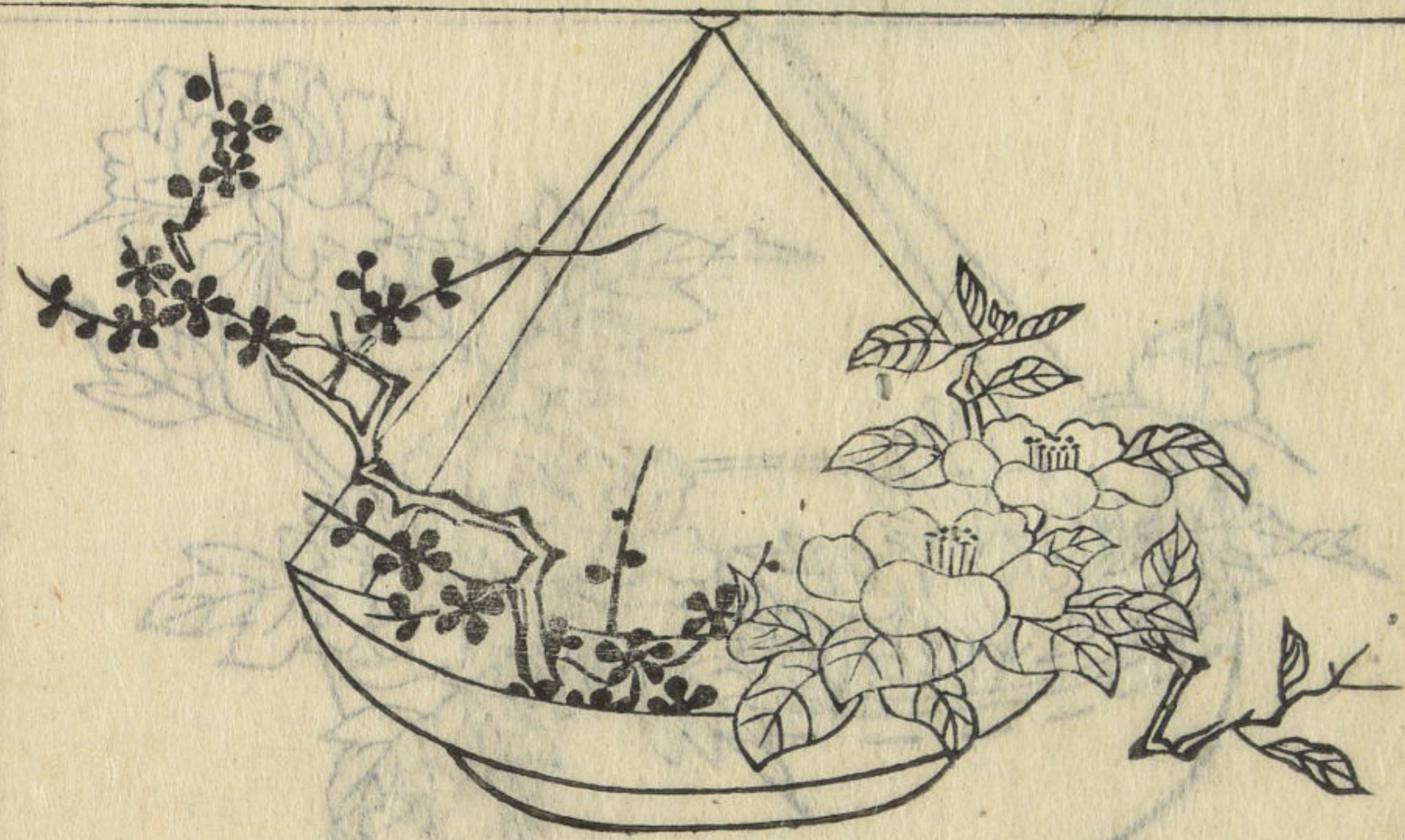
流花三

九



客方

竹百<sup>ニド</sup>切<sup>ド</sup>花入  
大花此新



客方

花入舟  
小船

竹百切花入

客方

二重切  
短花入



あき枝れ羽りさ

流書三

客方



一重切竹葉花入  
なれ一色

たかうき  
のりさ

流書三

廿

川口

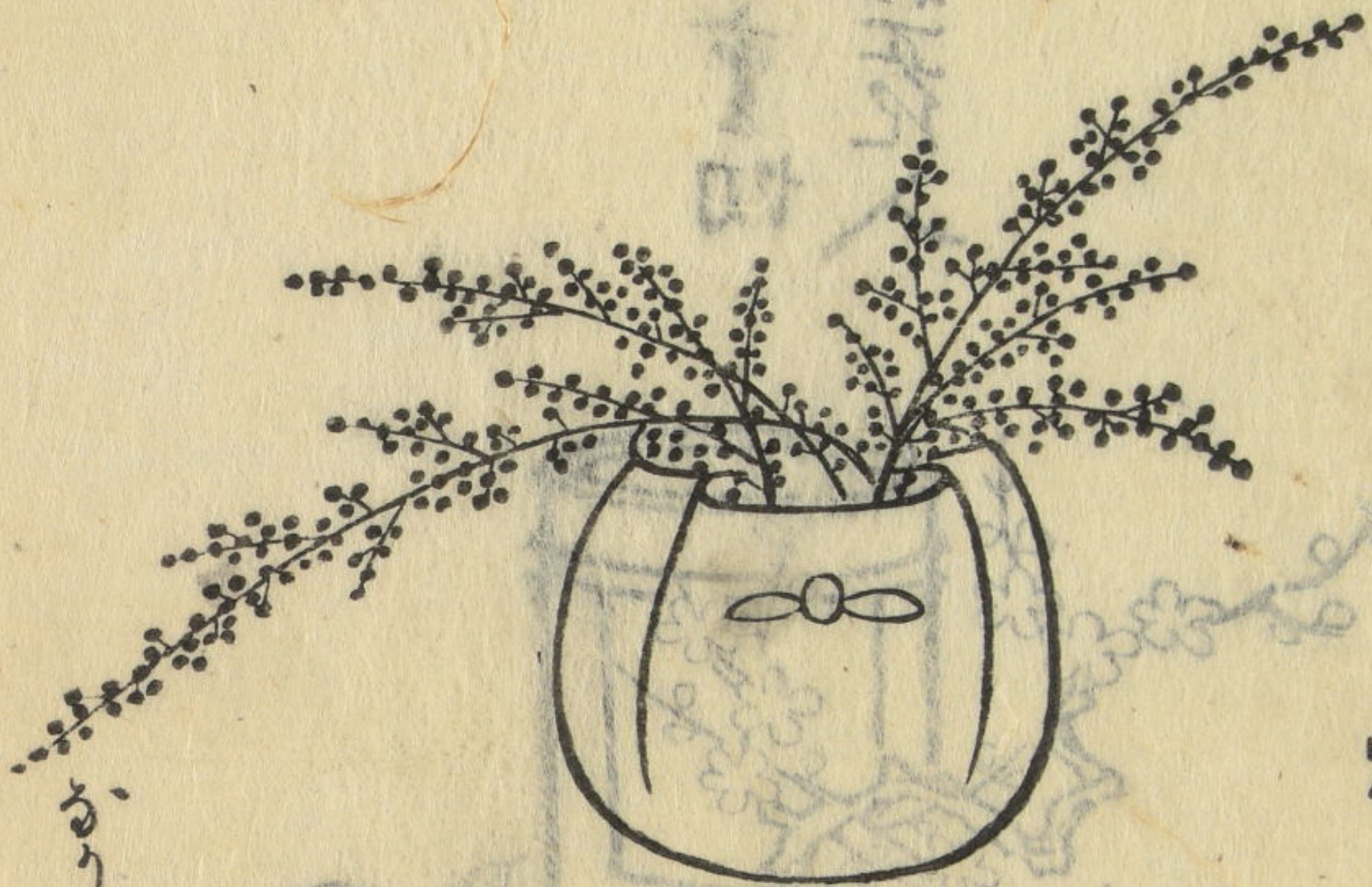


大籠花入

大籠花入

川口

川口



梅

巾着花入

川口

川口

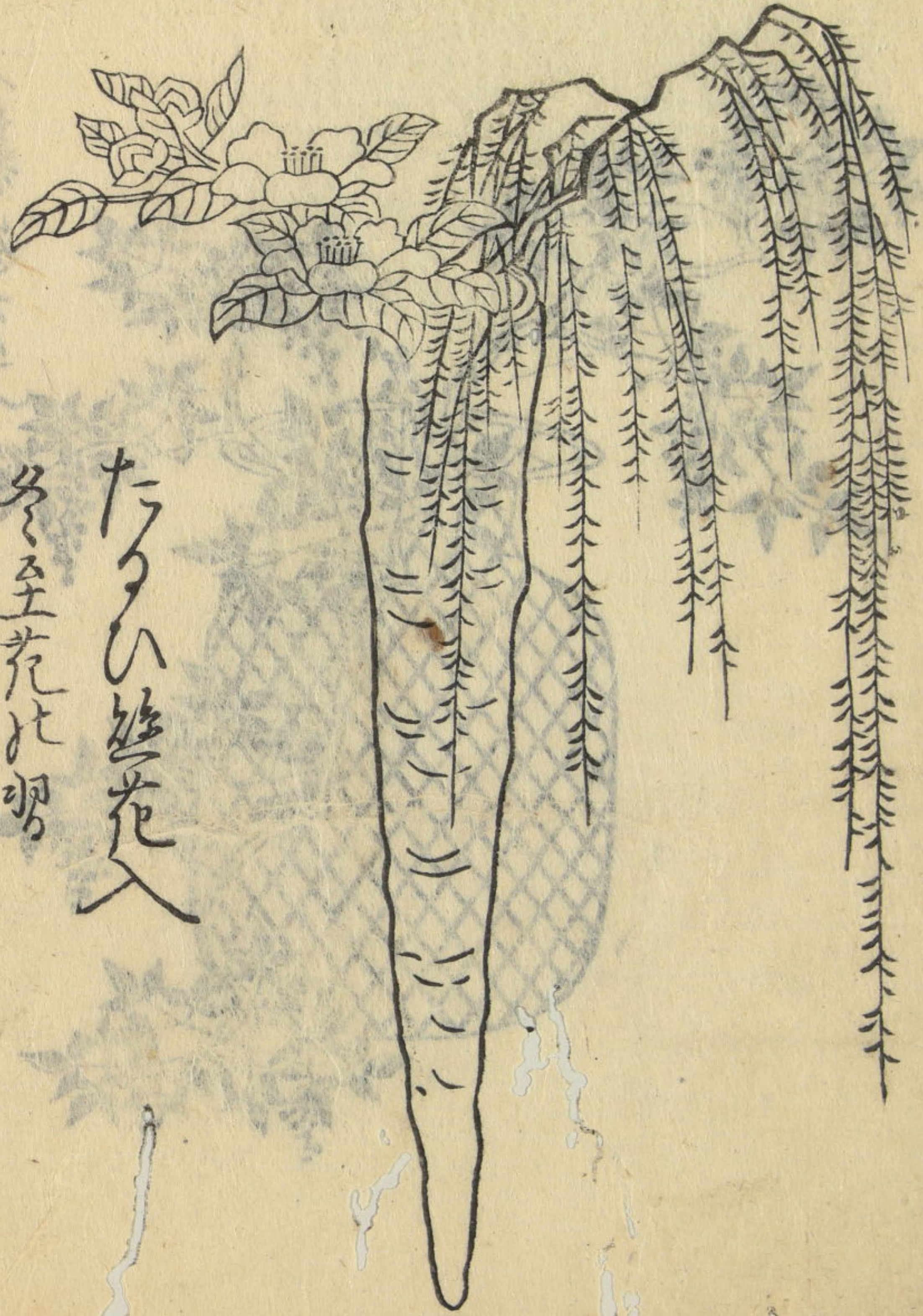
川口

桐花生



高加

たろい花入  
冬至花北明



桐花生

右十七花を生ち取ぬ此より一ツ花のあきハカ  
 りつとつとをせば十七花あき花におよそちぢい  
 あきさうち取げさうゆらゆるたふ水さのぬ  
 玉花きき入此よりきりおハぬよりけ花入さうゆら  
 せり水さのぬとをた入つとくより大なるきり  
 け取中花ハ十七の花きさうゆらとくしとら  
 花此よりききとゆらとゆらとゆらと花ききゆら  
 何ほの大あつたさうゆらとゆらとゆらとゆら  
 入れゆらのゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
 けりい花入おとのあき花入ハ小花ふおお  
 け口付深し

一 主人はあきらむる種をのりけ換たてハ右のさき  
 らかした時ハ花のさよりな一ぬと也何時と  
 人々ゆらた方とゆらとゆらとゆらとゆらと  
 三ツ釘ハあき釘くより上れさする中此針  
 かきめ此方トするは秘法也  
 一 庭ノ壺と針つサける時ハ壺中ノ土壺油先  
 傳番文あると去壺ひきき此時ハ傳番文  
 中真壺油はきよハ飴  
 一 或曰伝長ハ河舟ハ松浦ニケ月ノ壺ニ茶  
 ち起之ハ伝路河舟車ハ松浦ニ茶ニ茶  
 伝路河舟ノ入るハ











一 小とやうに二幅に對するまゝに好花をさし定  
て書かす

一 法をさすやうにけりまゝにけりゆゑのまゝに遊  
花入を花をさす中まゝにしてしめられしを  
まかすまゝに

一 色字より花のまゝに法しき花柄のまゝにまゝに  
けりし世にハまじりぬりけりし目録也

一 或字 廿四花のまゝにけりし目録也  
せんせんせんせんせんせん

一 庚辰生

一 蔣勳が切韻より庚辰八仙人嚴青が造也と云

字書より焼木末、庚辰のまゝにけりし目録也

一 或書より庚辰之事、茶葉、籠り、組物を目録也、ハ  
孰しるゝ大孰のまゝにけりし目録也、ハ

一 大筋北名物口傳ハ東山交此時古き一  
ある大筋のまゝにけりし目録也、ハ

大筋の上此おきめより切るとし、ハ  
あるまゝにけりし目録也、ハ



一 其方のなきこをなまぬし進こもや戻させし面自  
 一 戻たど大ふと切湯けりおまきまきいよありてよよ  
 一 一まはぬくべれ流し入は深付の香合さけり大なる  
 一 一そはらぬれさけりう降るの香合抽付大なる  
 一 一風所此戻のゆるきとよぶへきとあふ耐と音より  
 一 一黄戻又ハ定番の戻とすこしきめをせ行ぬる  
 一 一いりやういおまよ入をぬき其のぬ風所の戻  
 一 一とする也凡がの戻ハけりうとするぐう一風所  
 一 一のははたしよきうけざまばるをわきおかり  
 一 一そ良風所の新まハそこよこさう入の土器と口ハ  
 一 一戻こい入うつじけを口りと後らるる也凡がの

一 一そこ表乳は此るを奉書る外へさるは  
 一 一いり也口傳

一 一土鍋は魁と外へさるほごよ後らるる  
 一 一ハ炉五流れ下の輪とあこをわくこ口傳  
 一 一茶はよ諸るとまおるも戻入の戻とあて我す  
 一 一きとあよ戻とハいりて茶の戻とあ  
 一 一しりうハハ人く入るひるるふと右二を  
 一 一戻と入トをわくこ  
 一 一一切月れ立茶を耐ハ茶は上よ茶の戻とあ  
 一 一杯ははれこつ凡の茶持ハいり建のがしやあ  
 一 一くも此方ハまの戻とする也



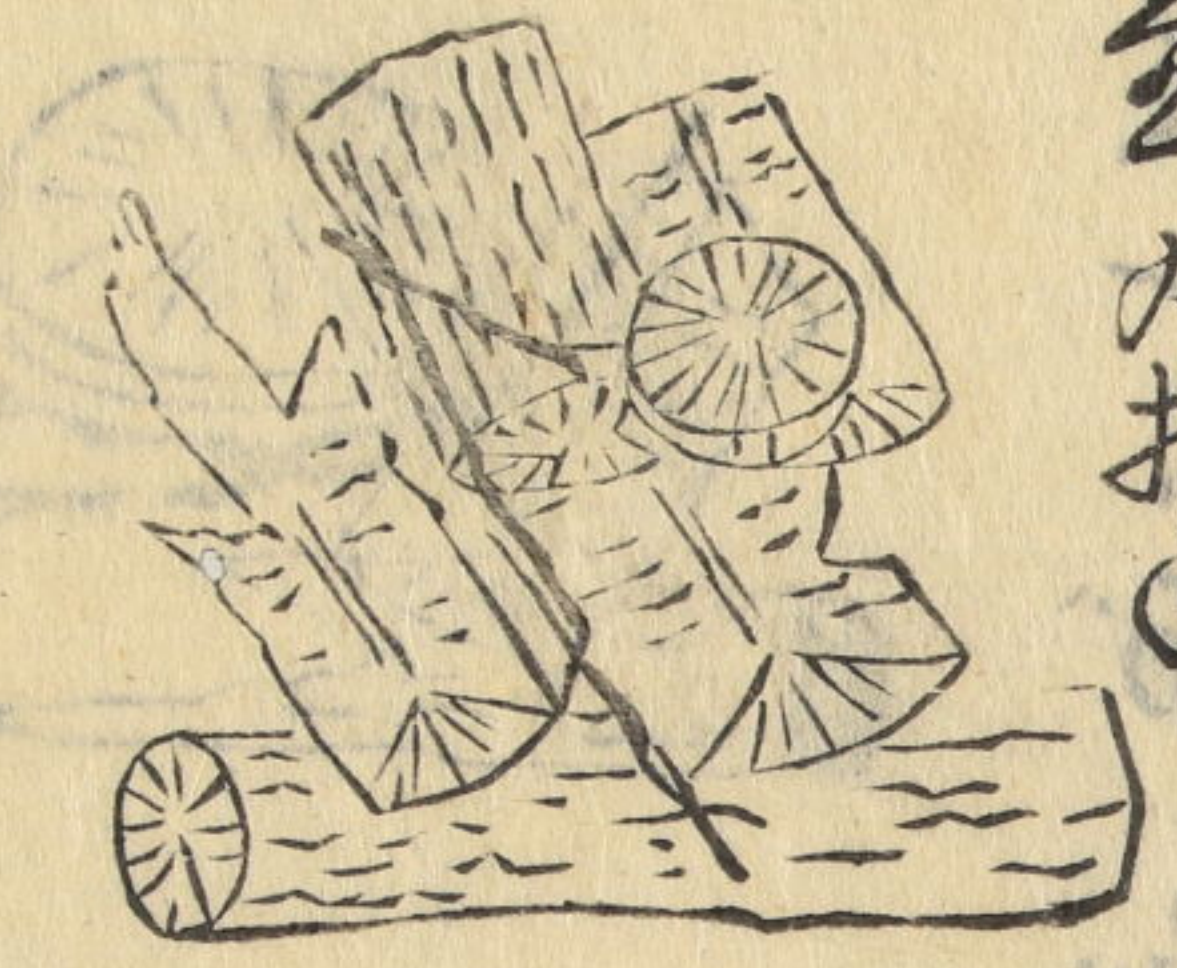


一 或曰重龍此令と解よ思ふよりわろく重二はを大の  
 一 ちまよすりと之方をも道はすす  
 一 ありまは此扱極美はと独ぬるい解に入ぬるを  
 一 ぬてうきませてほろくよして竹ぬるいぬる  
 ぬき日よあを  
 一 香合よはさおと合よとくくかろをよとそら  
 一 加羅久とを入るこ

其ミシ此スミ炭カ形ガタ

一五角

丸ダイ壹アイ九テ抄テ

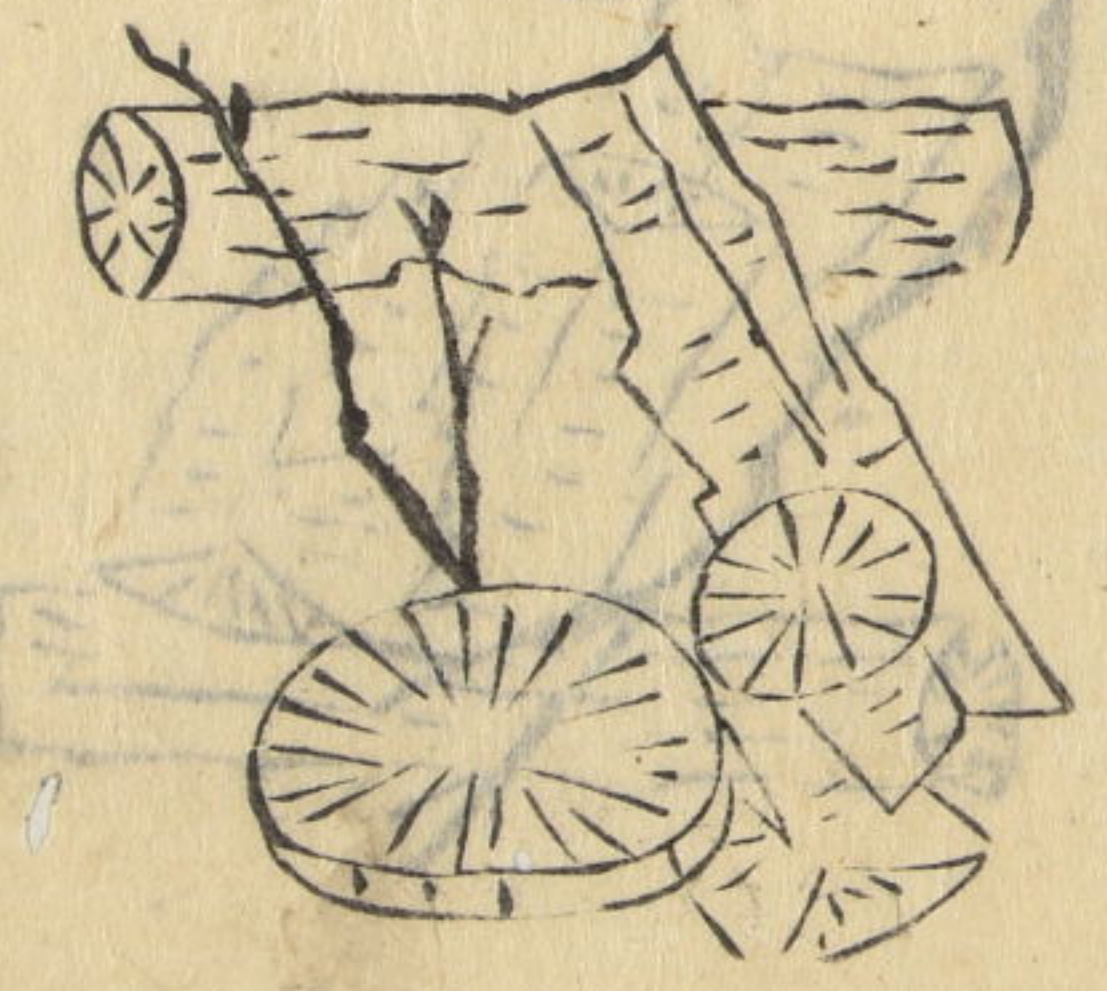


刻キ炭カ三サン中チュウ煖カ一  
 自ジ炭カ抄テ本ホン

向カウ壹クイ此スミ炭カ形ガタ

一五角

丸ダイ壹アイ七シ抄テ本ホン

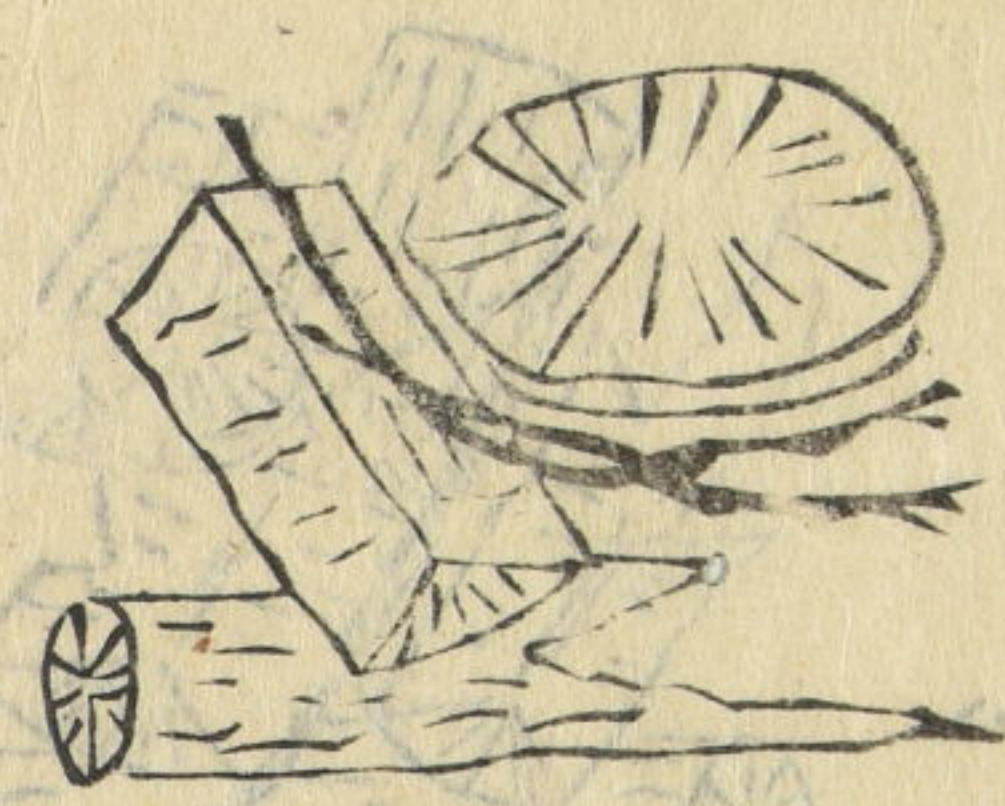


大ダイ煖カ小コ煖カ 自ジ炭カ抄テ本ホン  
 抄テ本ホン

臺殘の立片形

一之角

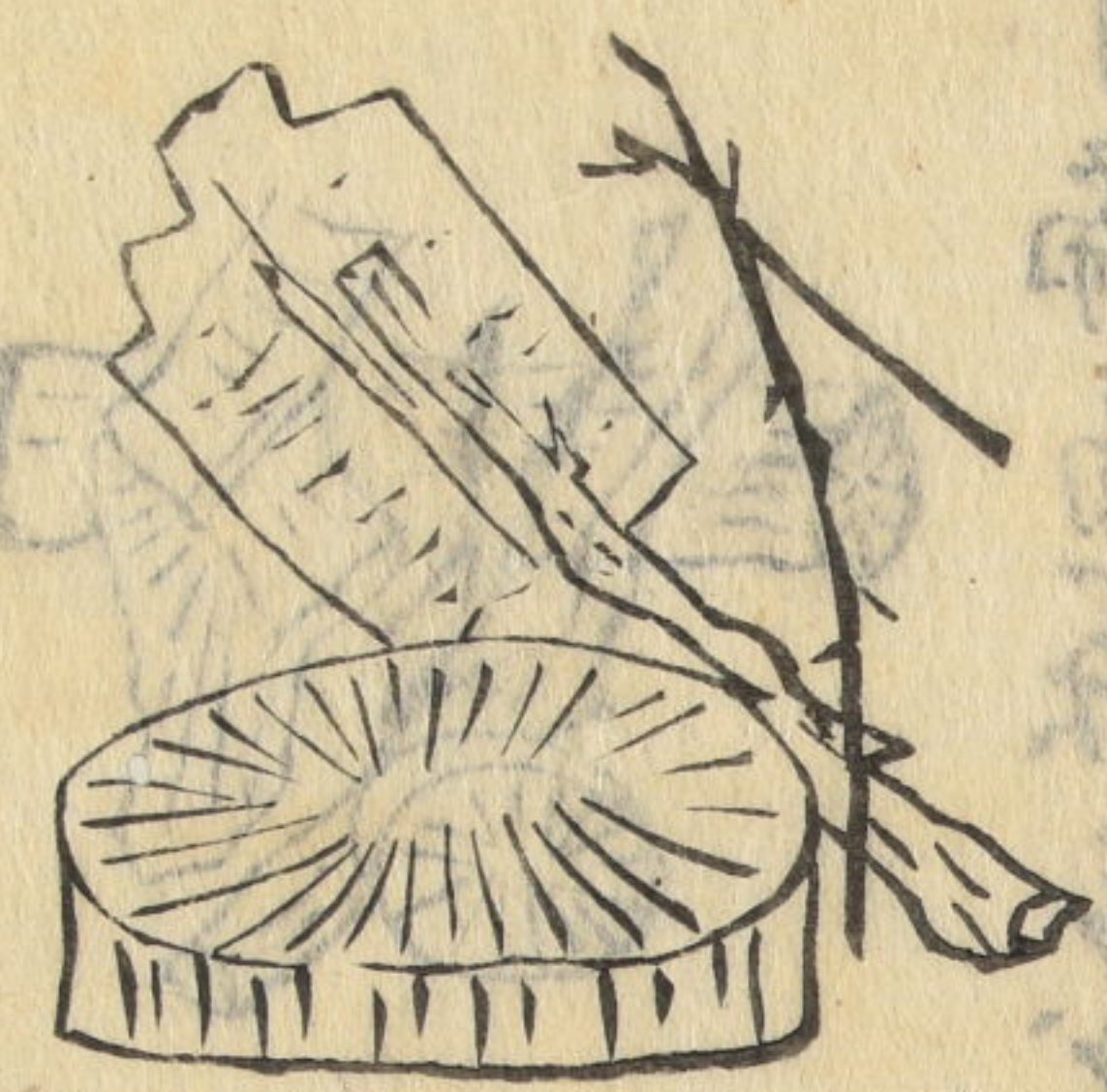
臺を削りて立片を削る



舟形之大輪大割  
自此始と云ふ事

櫃形片形

一之角

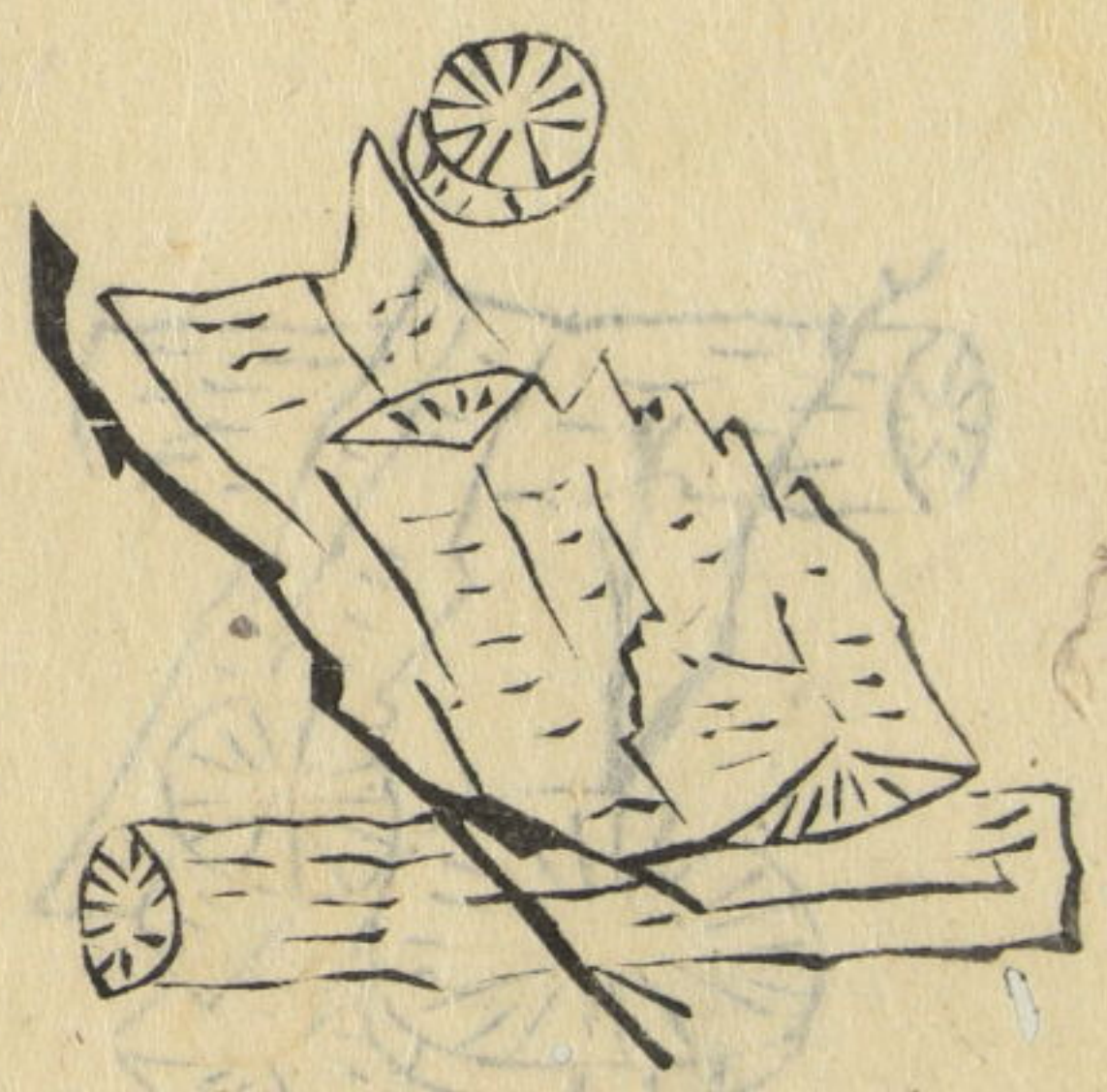


大割は細片枝白  
は輪片を

割直此片形

一之角

丸臺大割三寸

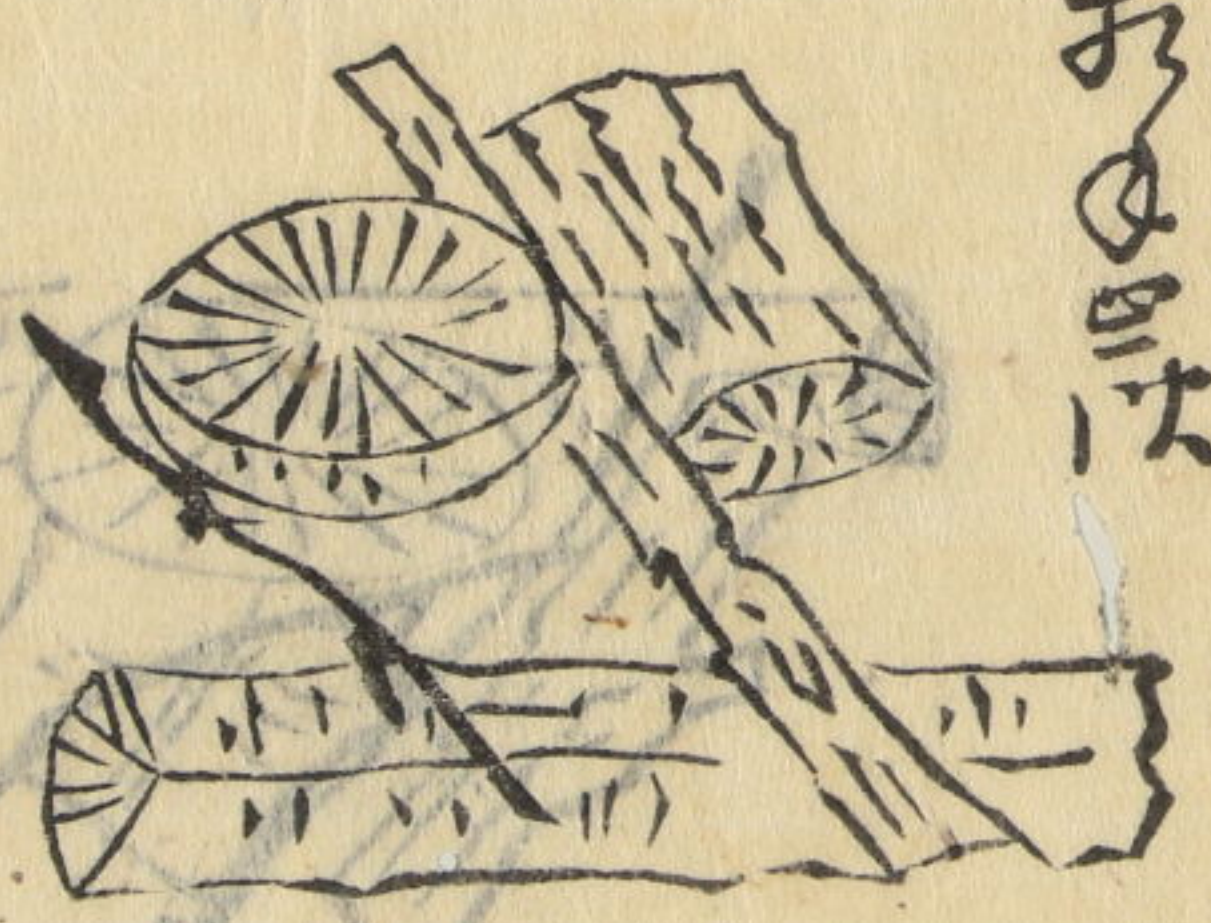


小輪を自枝片

割直片形

一之角

丸おの片

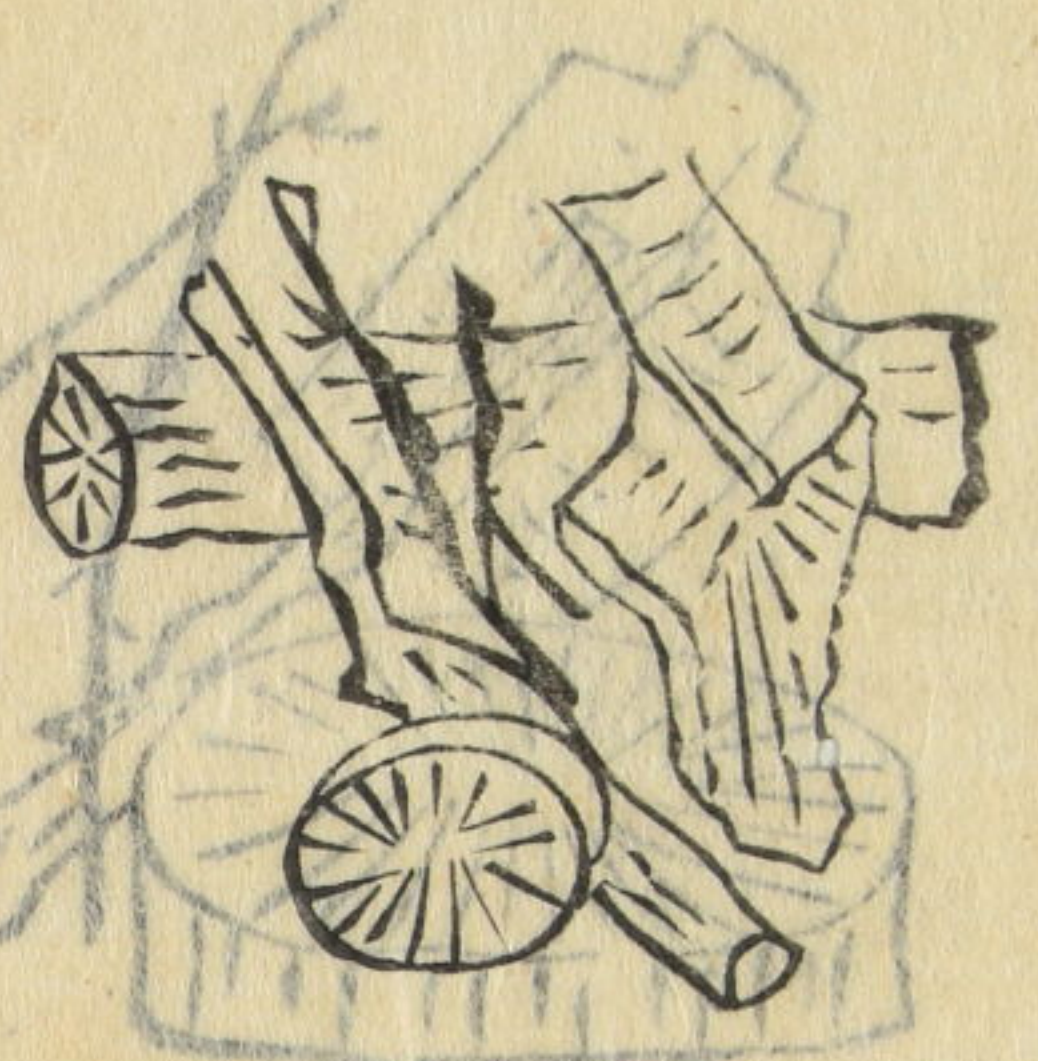


大輪細片は目白を削る

白芍通打此法形

一角

向在表長細以



中梅白芍之

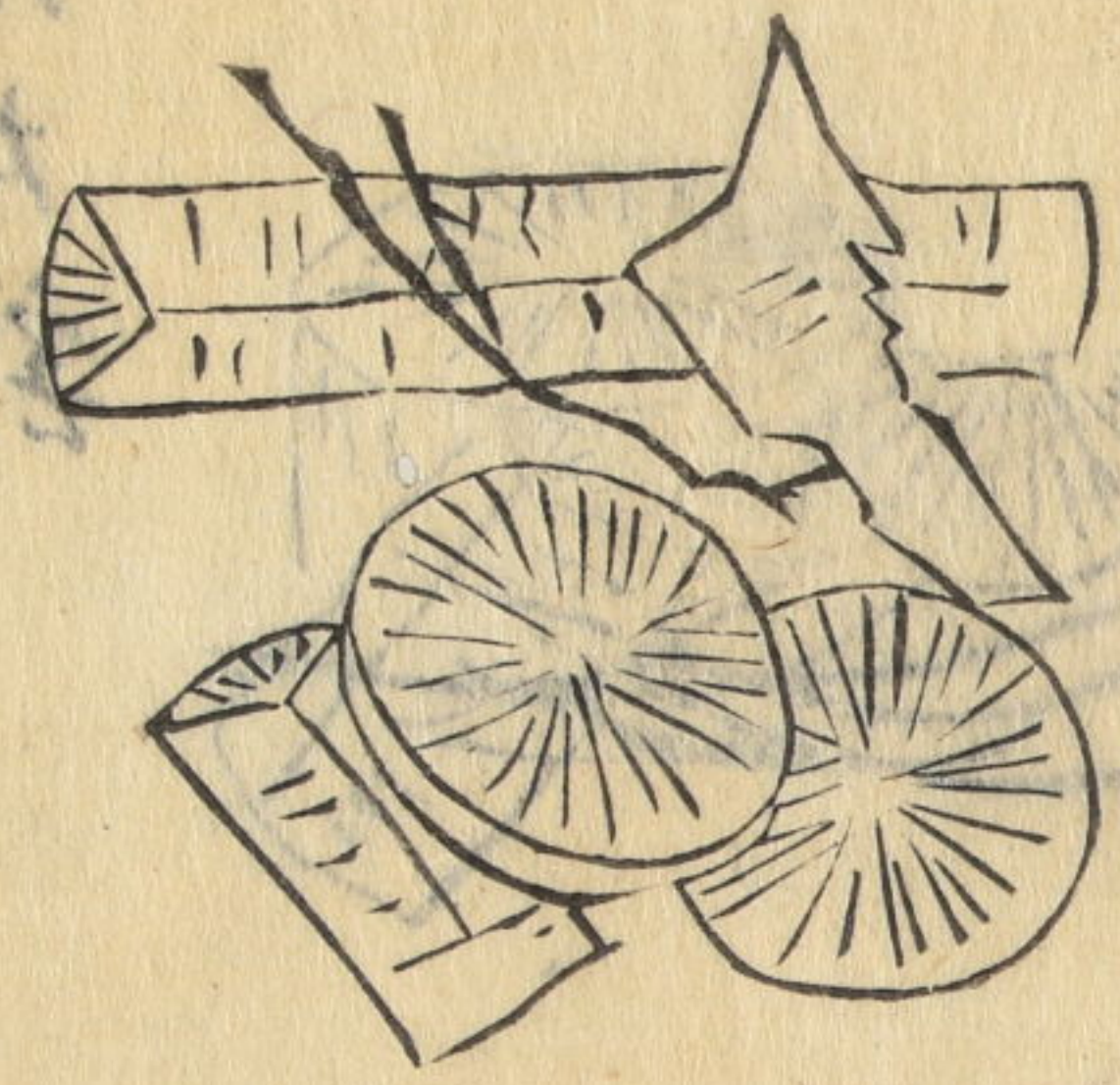
白芍

輪遠

一角

新表打心

大梅



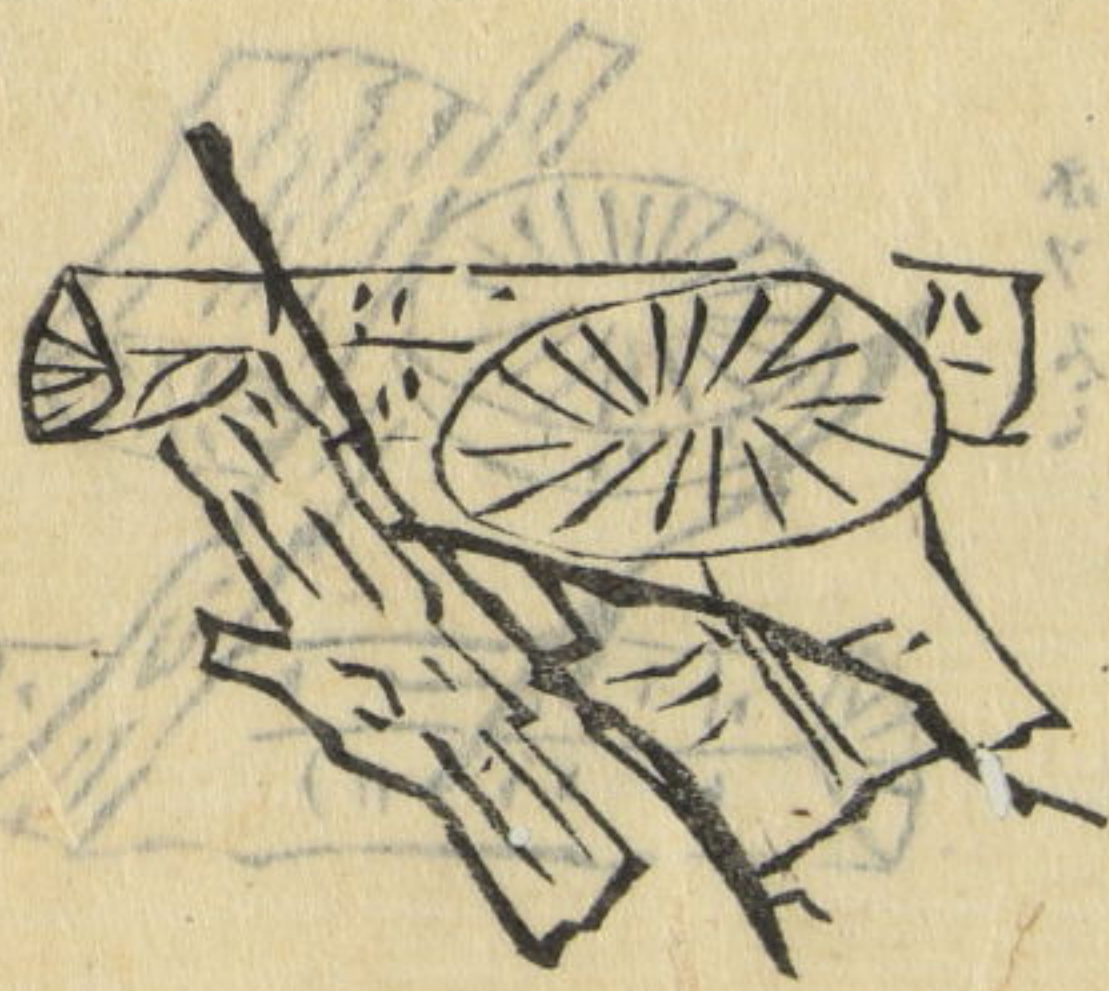
白芍

流考

櫛櫛此法形

一角

新表中丸



白芍

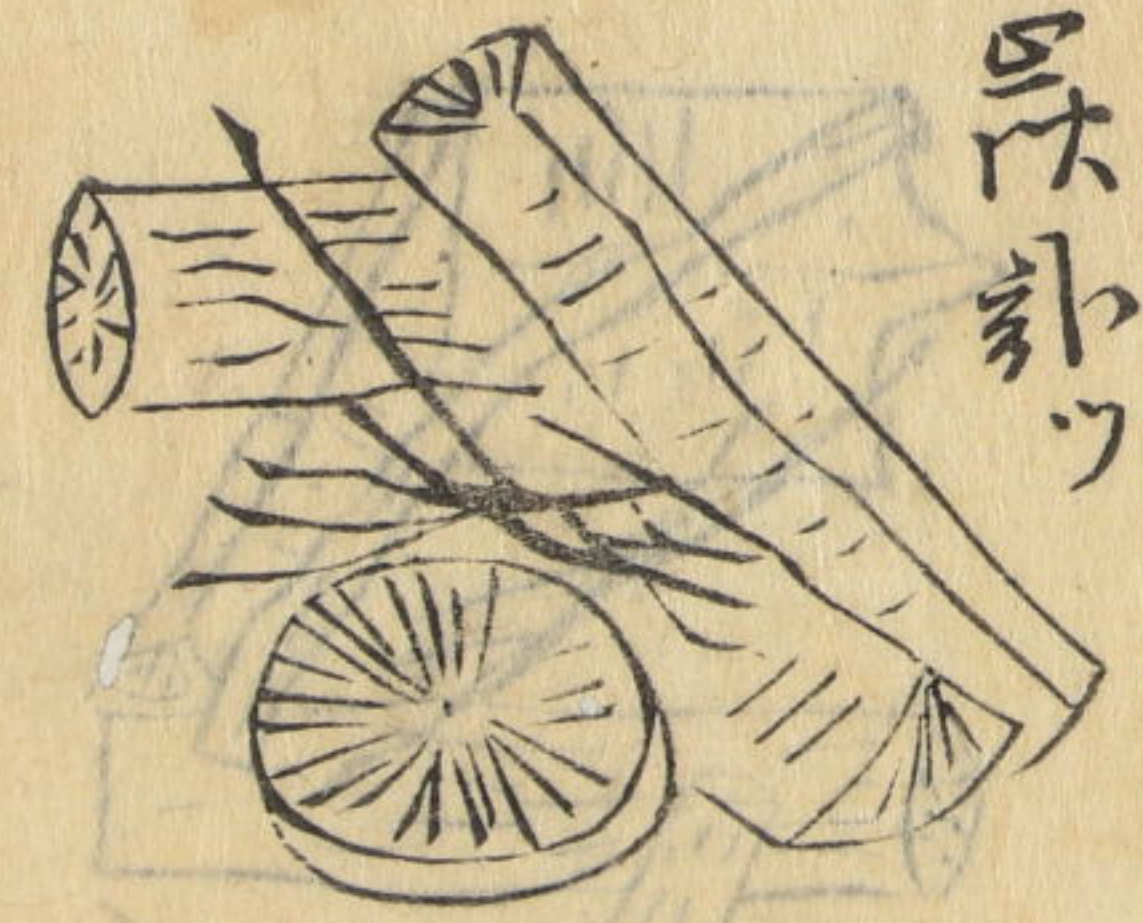
白芍

櫛櫛此法形

一角

新表打心

大梅



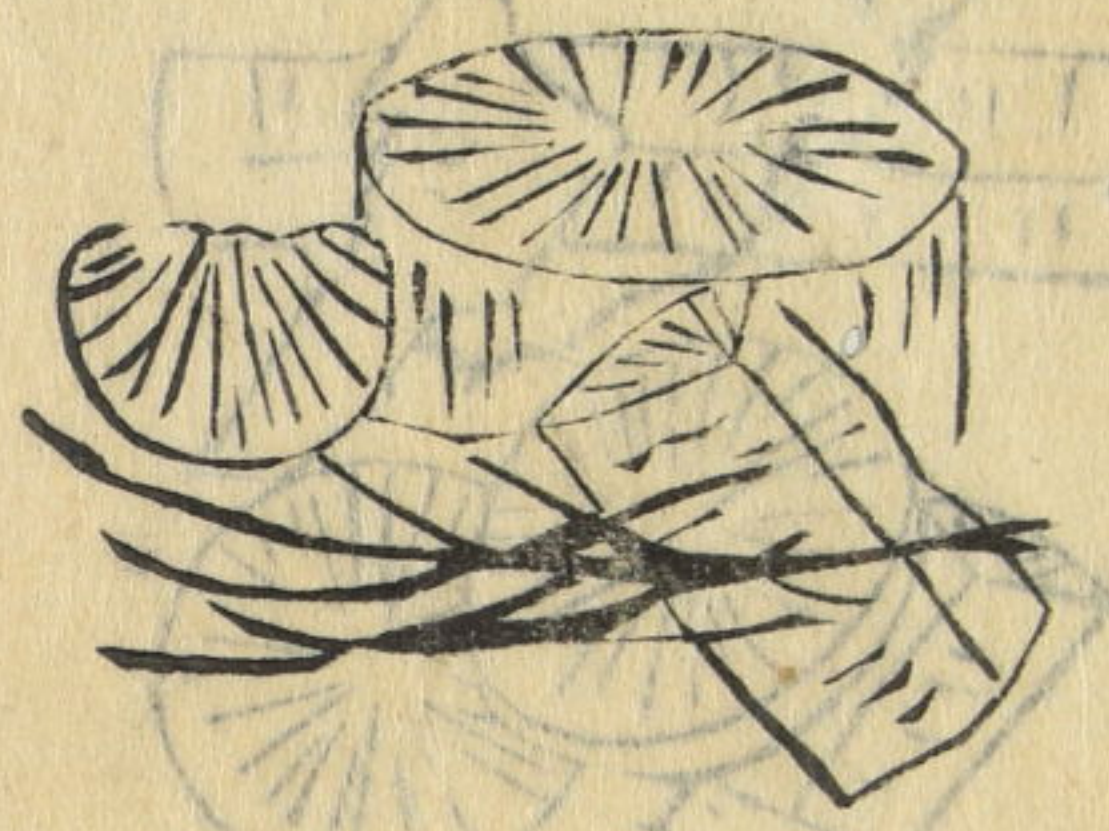
大梅白芍

流考

向櫛 五片取

一 三角

木 煇 大 割

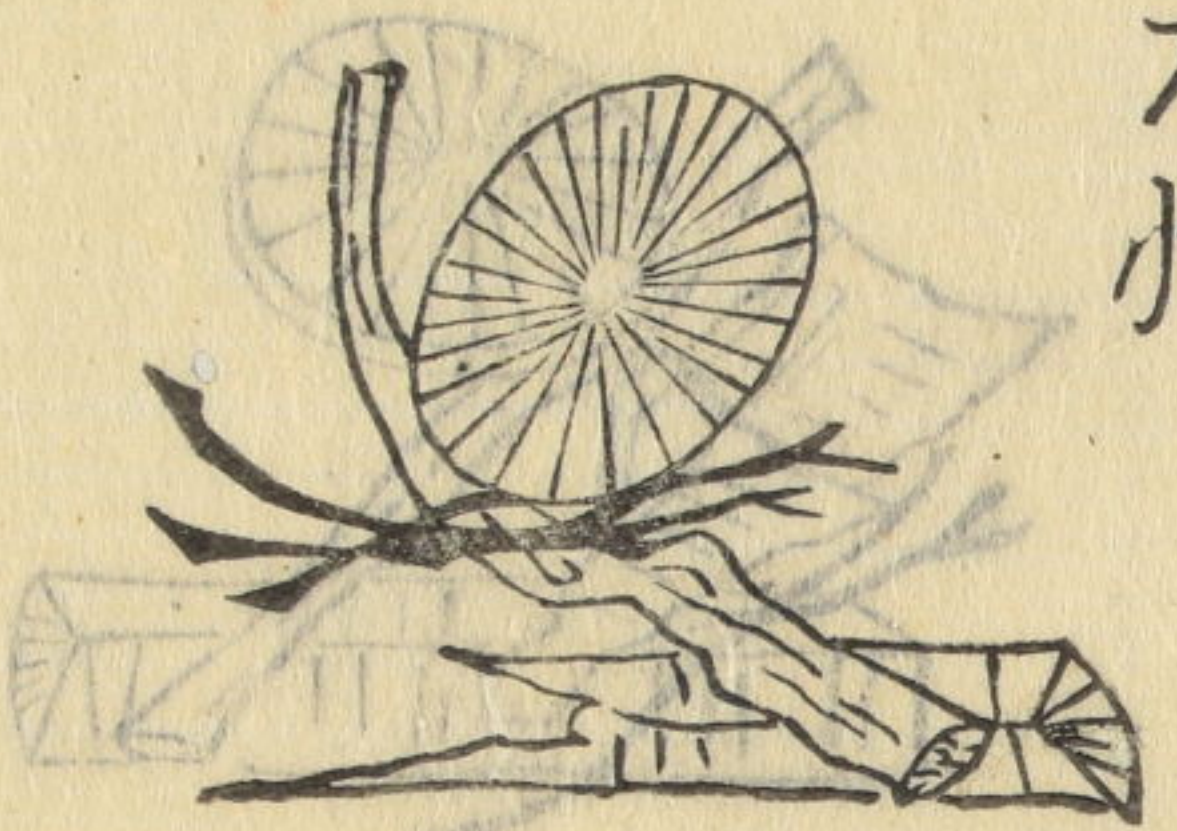


白炭 六 本

此 炭 之 形

一 七 角

曲 細 大 煇



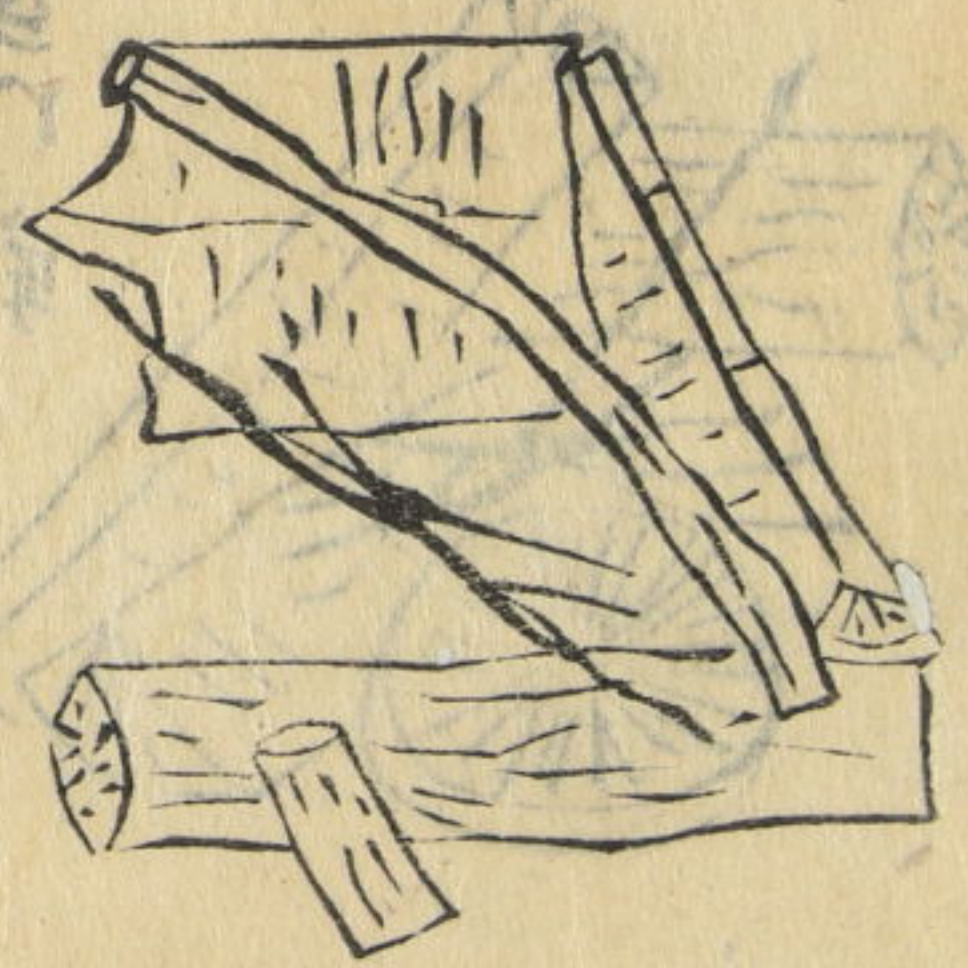
白炭 三 本

一 七 角

四角 炭 五 片 取

一 九 角

丸 炭 大 割 取

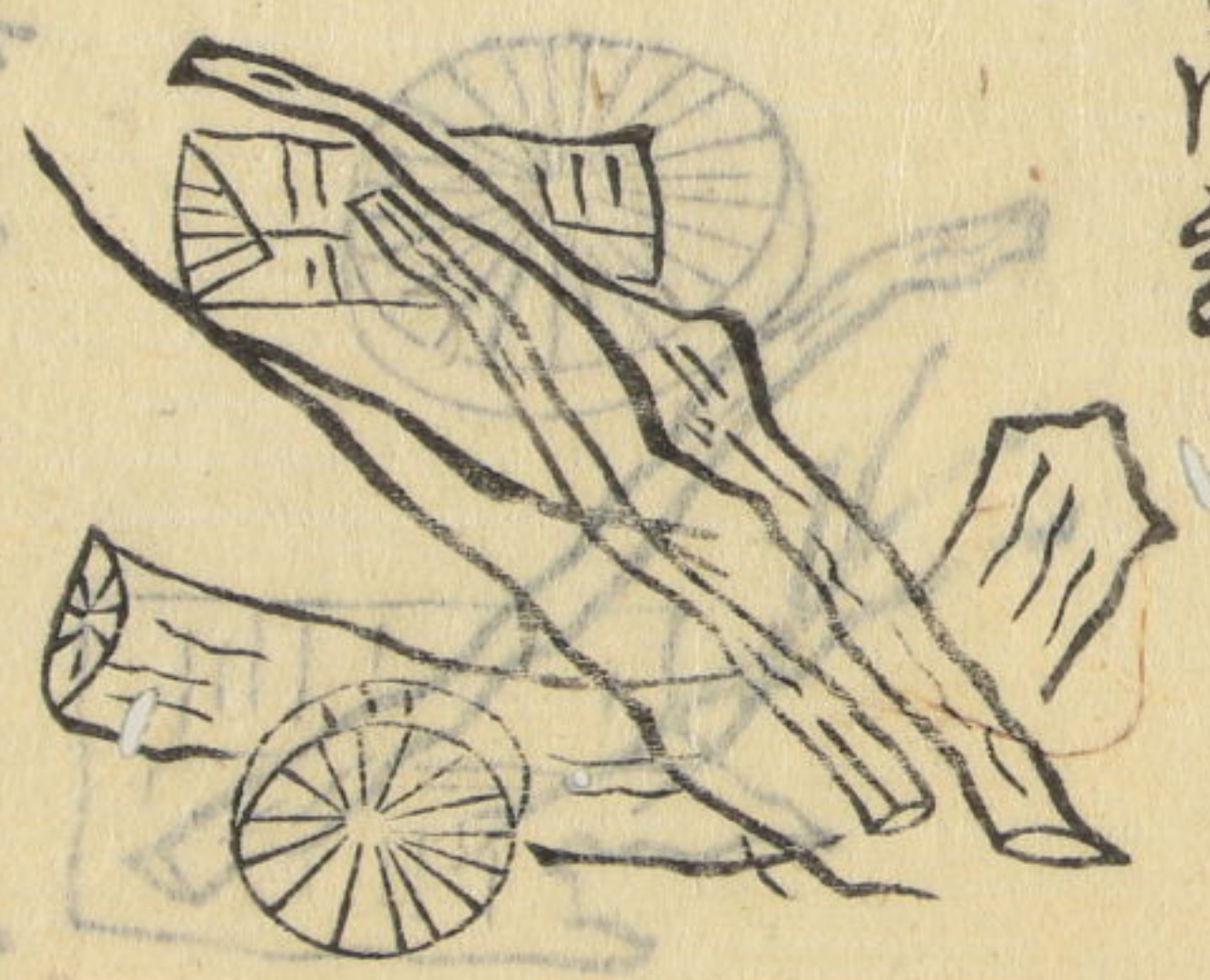


煇 炭 之 形

曲 炭 之 形

一 七 角

細 炭 三 本



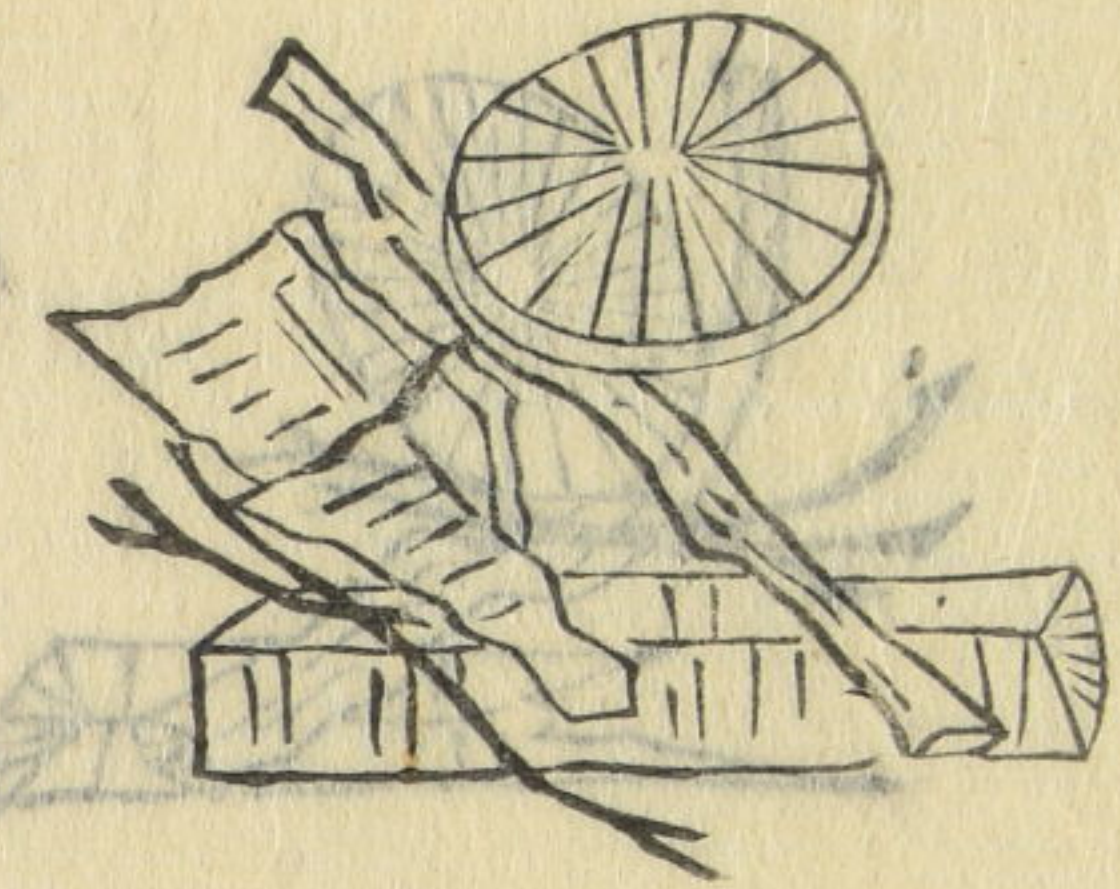
白炭 三 本 中 煇

炭 之 形

新嘉坡大形

一五角

冬山連(お)子細炭

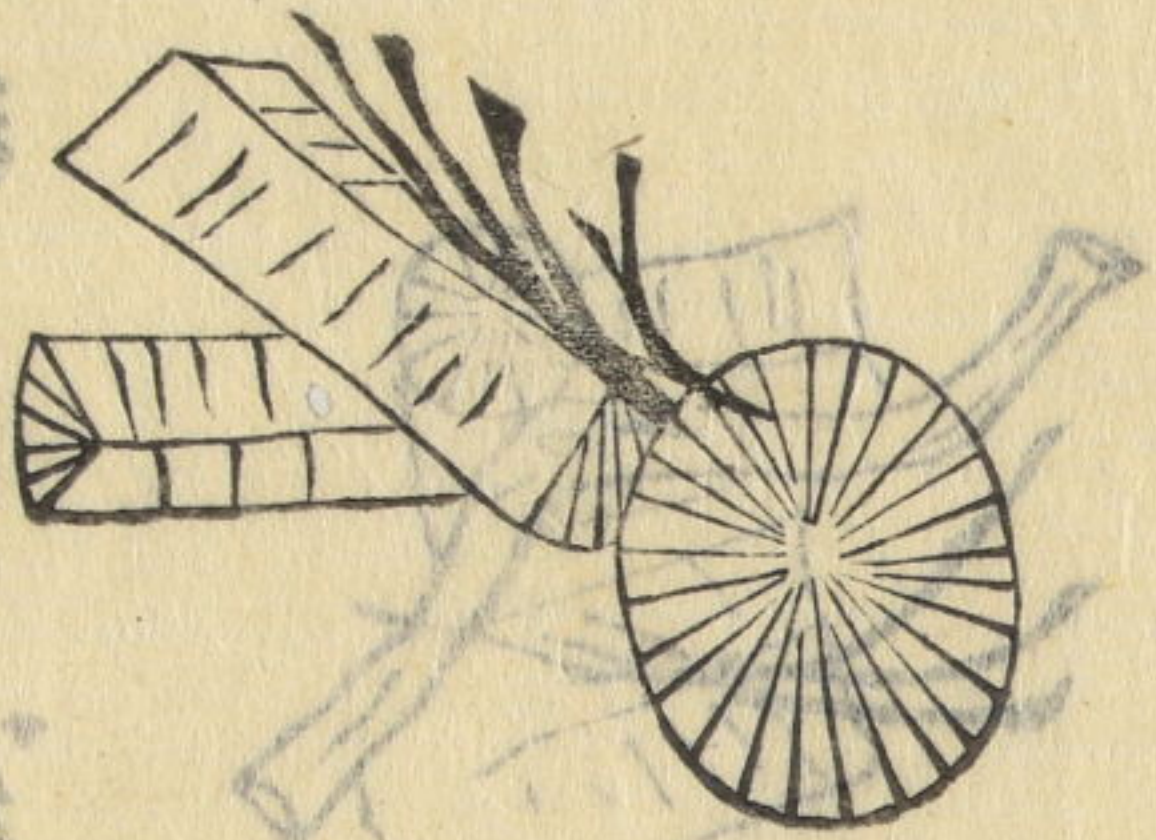


大脩白炭抄本

大脩基此炭形

一五角

大割部門

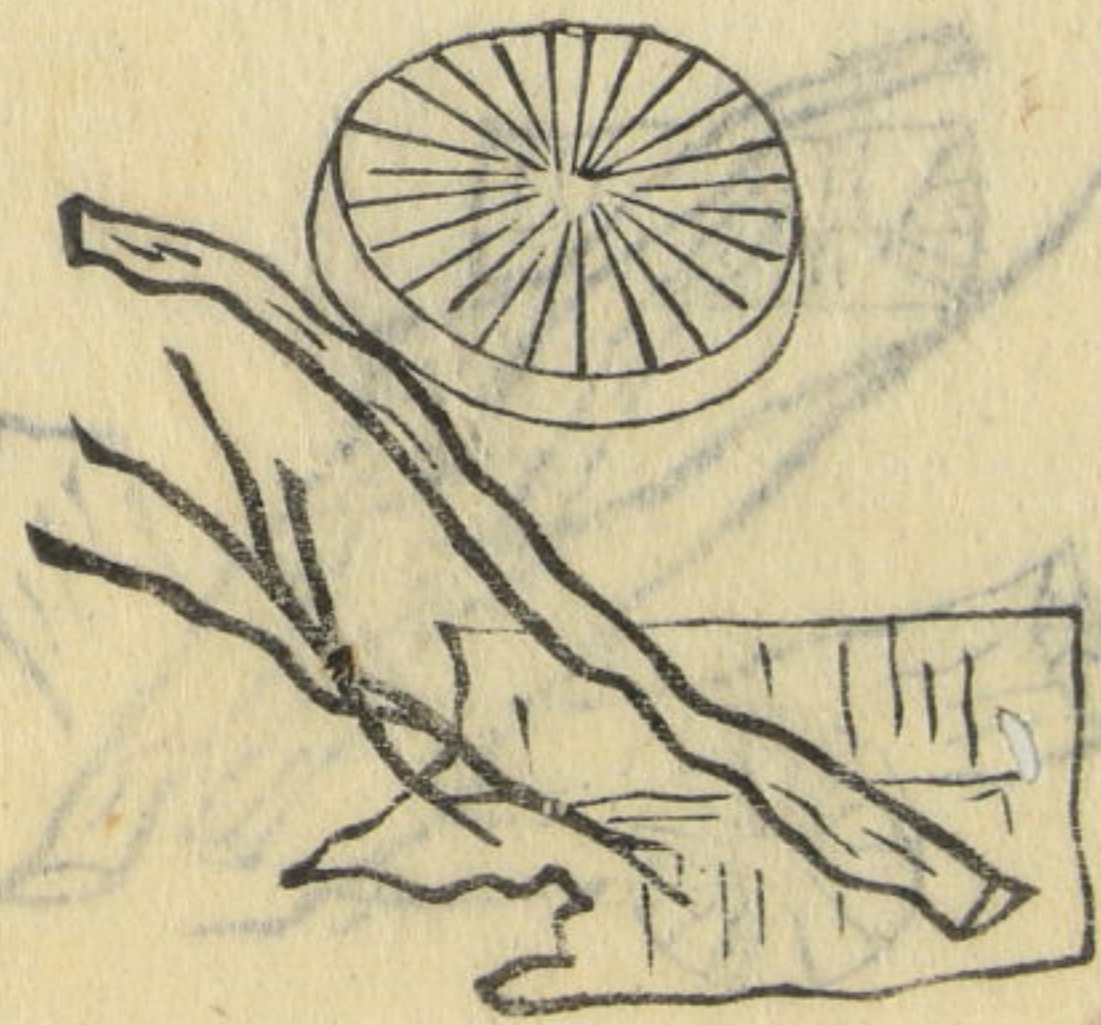


白炭抄本

新嘉坡大形

一五角

大割(お)子細炭

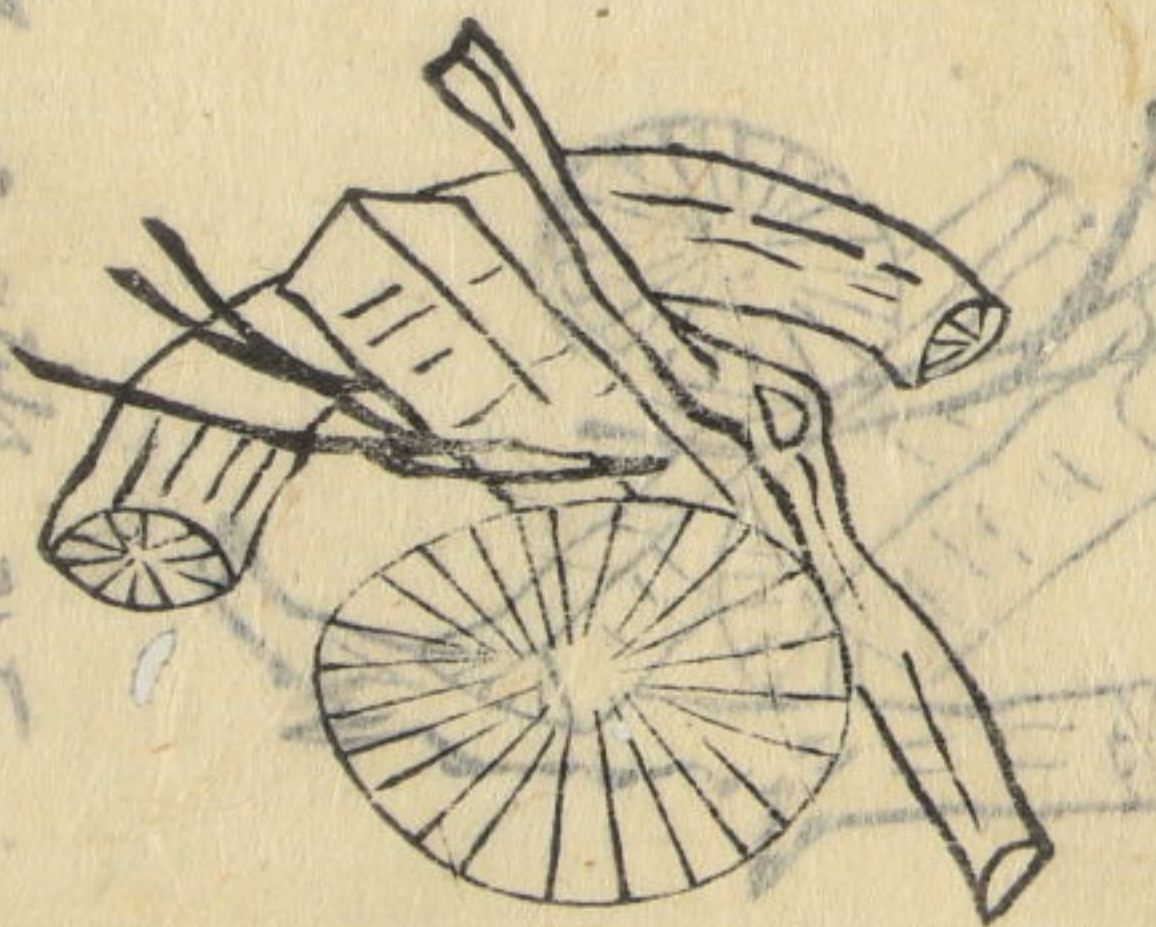


大脩長細炭白炭

向曲基此炭形

一五角

大脩長細炭

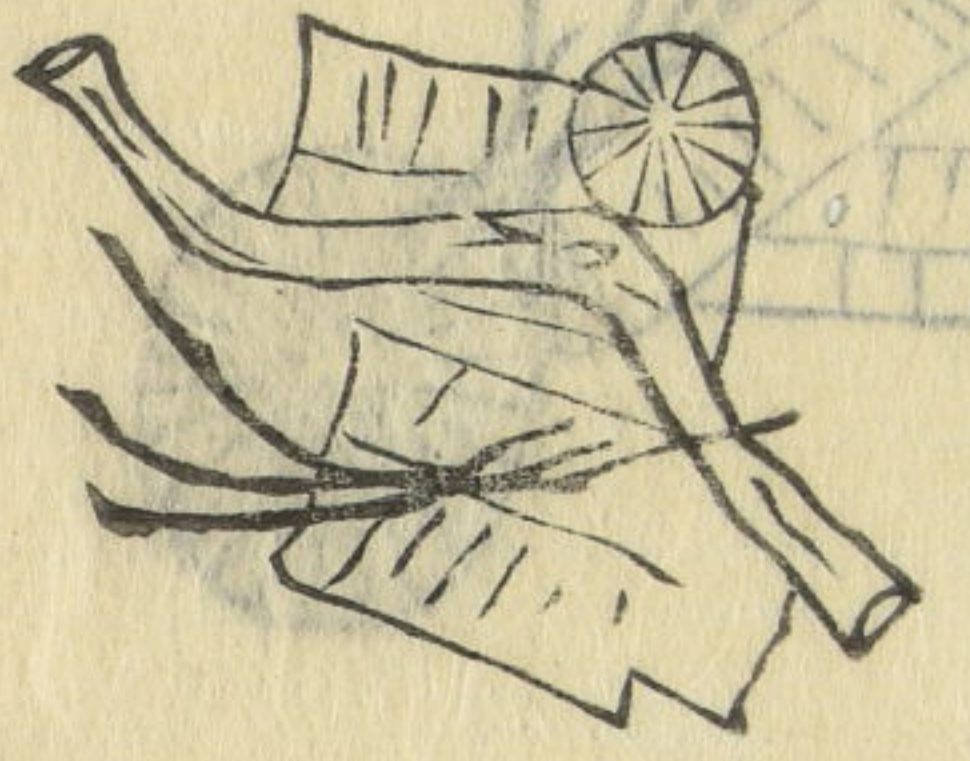


白炭抄本

立<sup>子</sup>炭形

一 卦角

大割部<sup>二</sup>曲<sup>二</sup>了細炭



小輪白炭<sup>二</sup>之<sup>二</sup>本

技<sup>子</sup>炭<sup>子</sup>此炭形

一 五角

大割<sup>二</sup>之<sup>二</sup>割炭



中輪白炭<sup>二</sup>之<sup>二</sup>本

炭寸法

- 一 長炭長サ七寸小口を寸八歩分炭寸あり
  - 一 相子炭長サ四寸小口炭寸あり炭寸二寸あり
  - 一 割炭炭寸五寸分寸あり修<sup>二</sup>割<sup>二</sup>
  - 一 輪炭たけ一寸八歩分
  - 一 細炭八寸あり九寸あり九寸割炭
  - 一 中炭六寸あり九寸あり炭一寸あり
  - 一 立炭炭<sup>二</sup>の<sup>二</sup>割炭皆たけ炭寸
- 凡<sup>二</sup>焼<sup>二</sup>之<sup>二</sup>炭
- 一寸あり又寸より寸より寸より寸より寸あり  
 焼<sup>二</sup>炭<sup>二</sup>上<sup>二</sup>徳<sup>二</sup>之<sup>二</sup>也

一 炉は角と切角より灰の先とおききす  
 八分又六分す内五分をいしむゆらりとくぎはすめ  
 ききと内の子かぬき四のしそぎはすべし  
 一 ぬは二灰をれまぐとすむか内くばくさ中し  
 すりららのきよすべし 自主領の時を  
 せは座をかす八分輪口を八分縁が八分上テ  
 かねと入る 焼口を八分縁が七下く 柳竹の  
 物を守り安らゆる板よむねと入自主領ハ  
 好縁とこいよめら板よすりきき  
 一 凡焼む所は板口土煎す法  
 一 五法は爪より凡焼のゆらき守りあつた名をよ

依べし子細なるに 膳中よりききと凡焼の内又  
 ハききを故寸法定るなり 一寸ありとハち秋と  
 細く直れとバより土煎の灰と一寸あり  
 一 土煎お灰むゆらとけける土煎れおおつたを母  
 の如く灰をゆらと土煎おのちのぎは二方のぬは  
 の角より伝す 又一方のぬはの後をすしと  
 のきとききよ  
 一 灰の法は二言山とちの千とバ一方にきつとく  
 半よりすらぐり 凡焼の向ハきのぎときき  
 又や凡焼ハ向ゆらぎくのきよとく  
 一 妻子凡焼ハ土煎のおとぬくけく向とく





2000.1.7

500-

洋行三

お入りのり

行口は又

一秋をこれ口切よりより年々此書よりくハ陰行白

と土を夏に於て対ハも此行白と土を又陰行白

よハ蓋垂と土を少許行白よハ蓋垂と土を

院中ハ何とある

高子ハ此之字

一高子ハ此法より故土無まくと重圧ハ多くと付

とて故よすも何すもしと此法ハ入付

高子ハこのうけちぬきと土を入付も此法を

するし凡が此心あり

高子ハ此法より

